

## 《WE 認証者インタビュー》

### 2007 年に中国国家友誼賞を受賞

—— 現在も日本向け鉄骨製作を管理 ——

中国・浙江（せっこう）省の鉄骨ファブリケーター、浙江精工鋼結構有限公司の特別顧問を務める星良賢氏（79）は 2000 年、日本溶接協会の溶接管理技術者（WE）特別級を取得した。04 年から同社の工場管理を担当するようになり、高さ 492m の「上海環球金融中心」（上海ワールドフィナンシャルセンター）や、08 年北京五輪のメイン会場で「鳥の巣」の愛称で知られる「国家体育場」など著名な建築物の鉄骨製作に携わった功績が評価され、2006 年に浙江省人民政府から「西湖友誼賞」、07 年には中国政府から「中国国家友誼賞」を受賞した。10 年以上にわたり、中国で鉄骨製作管理にあたる星氏は後進の技術者に対して「資格がないと国際的には通用しない。海外で仕事をするなら資格はすぐ取るべき」と激励する。



#### ●2000 年、WE 特別級を取得

星氏は福島県相馬市出身。実家は精密機械関係を手がける鉄工所を営み「現在は兄の甥が 4 代目を務める」。大学進学率が一桁の時代、「工学部を勧める親の意向を受け、工学院大学工学部機械工学科に進学した」。卒業後、桜井鉄工所に入社、柏工場（千葉県）に配属される。社外留学で東京大学の仲威雄研究室に 2 年間在籍し、駒井鉄工所（現・駒井ハルテック）に移籍後は技術課で主に技量試験や施工試験に携わった。その後関係会社の東北鉄骨橋梁に出向となり、役員などを経て定年を迎えた。

「ISO にも携わっていたので、定年後は ISO 審査員でもと考えていた」ところに、中国の話が舞い込んできた。

森ビルが手がける海外大型プロジェクトとして話題を集め、08 年にオープンした「上海環球

金融中心」の鉄骨製作に駒井鉄工が携わることになり、現地工場のスーパーバイザーとして星氏に白羽の矢が立った。

「鉄骨重量は約 7 万ト。そのうち 2 万 5 千トを精工（現・浙江精工鋼結構有限公司）で製作することになり、04 年から中国との関わりが始まった。上海環球センターの後も精工に残ることになり、鉄骨重量 5 万トの鳥の巣の鉄骨 2 万 5 千トの製作に関して、引き続き、スーパーバイザーとして管理にあたった」

浙江精工では、会社側の意向を受け、国土交通大臣認定取得にも貢献した。

「手溶接や半自動溶接験に関する演習問題を中国語に訳すことから始まり、学科講習、実際の検定までの細かい段取りなどを担当し、100 人規模の受験者はすべて合格した。中国国内の鉄骨需要が減少傾向にあったなか、当時 30 代後半だった経営者には先見の明があり、日本の大臣認定取得を推し進め、微力ながらその一翼を担った。大臣認定については昨年 4 月、3 回目の更新を済ませた」

著名鋼構造物の製作を支えた功績は形になって現れる。06 年に受賞した「西湖友誼賞」は浙江省人民政府が経済発展と社会発展に貢献した外国人専門家に授与する最高荣誉賞である。07 年に受賞した「中国国家友誼賞」は、中国政府から同国の社会開発、経済、科学技術、教育、文化などの発展に貢献した外国人に授与される最高の賞とされ、当時の人民日報英語版も星氏の功績の一端にふれている。「9 月 29 日、北京の中国人民大会堂で本賞を伝達された。翌 9 月 30 日には胡錦濤主席はじめ党と国の指導者が出席する国慶節祝賀会に本賞の受賞者が招待された。2 千人にも及ぶ会場の光景は今も鮮明に記憶に残り、改めて光栄に思う」

07 年以降も星氏と浙江精工の関係は続く。現在は特別顧問を務め、1 ヶ月間浙江省に滞在して、1 週間帰国するローテーションを繰り返す。「日本の仕事にも徐々に携わる機会が増え、現在は日本向け鉄骨の専門工場で管理に携わる。月産は約 1,500 トで今年は繁忙が続く見通しである。日本向けの専門工場のワーカーは比較的レベルが高く、管理者の求める品質に上げることができる。ただ、日本の工事を手がける場合、要所には日本人の管理者を充てることも重要になる」

星氏は大学卒業度、鉄骨製作会社に就職した経緯について「特に思い入れはなかった」と回顧する。長年技術畑を歩み、ボックス柱の角継手に適用するサブマージアーク溶接技術開発の第一人者であるが「当時は会社が投資する以上、成功させなければならないという一心で開発に取り組んだ」と振り返る。社業の傍ら、鉄骨製作管理技術者の講習会で講師を務めていた経験からも鉄骨製作管理に関する造詣の深さがうかがえる。

中国国家友誼賞の受賞者とあって、中国のスマートフォンで星氏の名前を検索すると、WE 特別級をはじめとした資格もすべて表示されるという。

「資格がないと信用されないという面もある。日本の技術は世界のトップであり、特に溶接に関しては、鳥の巣に用いたボックス柱もすべて私が携わったサブマージアーク溶接を適用している。資格の時代と言われるように若い世代にはいつか役に立つので、WE はじめ主要な資格については早いうちに取得することを勧める」